史跡院庄館址

発掘調査略報

津山市教育委員会

1974.1.

〔1〕 位　　置

史跡院庄館址は津山市街地の西約４Kmの地に位置し，院庄平野のほぼ中心に所在する。

行政区画的には津山市神戸字御館４４３番地である。

〔2〕 調査の経過

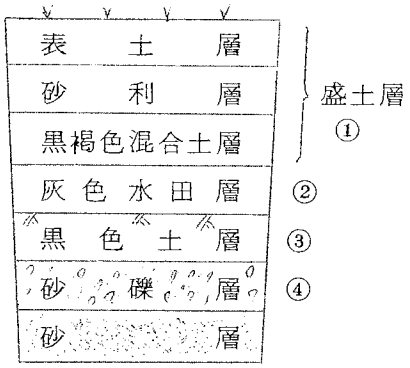
本調査は館址を史跡公園として整備するための基礎的資料を得るためのものとして，史跡地周辺及び内部にトレンチ（巾，長さとも一定せず）を１２ケ所実施した。トレンチの内訳は，土塁に５カ所，館内に７カ所である。調査にあたっては，市職員河本清が現地にあたり，市文化財保護委員渡辺健治院庄小学校教諭土居徹氏を調査員として委嘱し，遺構の検討ならびに評価について意見を受けた。調査は昭和４８年１１月２１日から開始し現在に至っている。これらトレンチは，図面，写真等の記録後は埋め戻して原状に復す予定である。

〔3〕 調査の概要

① 基本的層序

調査により確認された館址内の土層の基本的層序を模式的に記せば図のとおりである。

土　層　模　式　図



盛土層（①）は地点によってかなりの違いが見られ，浅い所は約２０cm，深い所で約５０cm前後である。

この盛土層は神社建築にかかる整備の盛土と考えられる。盛土直下の灰色水田層（②）は，江戸時代頃に水田として使用されていたものと考えられる。この土層直下と黒色土面から多くの遺物が検出されている。

黒色土層（③）は調査地のほとんどで確認されており，この面が館期の生活面と推察される。

黒色土以下は無遺物層となり，暫時，砂礫層から砂層となっている。

② 遺　　構

イ. トレンチ２，３，４，６，１０により土塁を直角に切断した結果，トレンチ２以外は黒色土直上または一層の間層をおいて，褐色土または砂礫混合土による長さ約2.5 m～5 m×厚さ約0.4 m～1 mの盛土がみられる。この盛土内はトレンチ１０に於て坏片（糸切底）鉄釘片が包含されている他，トレンチ３における盛土下の基礎としてある灰褐色粘土層に須恵器（坏糸切底，甕）青磁等が検出されたのみで，他の地点の盛土からは遺物をみることはできない。トレンチ２における盛土の状況は，他の地点と少し異なり，黒色土と盛土の間に二層に大別される灰褐色の堆積土がある。この堆積土はトレンチ１とほぼ同様な状況を呈している。西南の広場にトレンチを実施していないが，この地区は東西に延びる浅い谷状の古地形を呈し，その上に吉井川の氾濫により堆積があったのではないかと考えられる。

したがって，トレンチ２における盛土も他の地点の盛土と同時期に築造されたものと考えてよいであろう。

これら盛土の時期は，厳密に決定できないが，土層等の検討から館期の土塁として構築されたものと看取される。また，この土塁は後世に盛土され現在の土塁となっている。

ロ. 井　　戸

トレンチ１の地点で，現地表下約４０cmから検出されたものである。掘方は約2.2 m×2.4 mの隅丸方形状のものに東に長方形の突出を２ケ所もった不整形なものである。この掘方のやや西よりに児頭大の河原石により井戸枠を組み，口径約６０cm，深さ約９０cmの井戸を構築している。井戸底からは板状の木片が数枚検出されている。

石組中から摺鉢，甕，土鍋片が出土している。現在調査中である。

ハ. 柱　　穴

柱穴はトレンチ2,5で各１個，トレンチ９で５個，計７個の検出をみたにすぎない。しかし，限定されたトレンチ調査ではこの程度でやむをえないと考える。むしろ，土層等から判断すれば，面的調査を実施すればかなりまとまった建物の存在が予想される。

検出された柱穴は館期の基盤層となっている黒色土層を切り込んでいる。

径約２５㎝，深さ約２０㎝のもので掘立柱の建物の存在を裏付ている。トレンチ９に於ては，現井戸をとり込む状況で検出されているが，井戸の上屋としての建物かどうかは井戸構築の時期決定をまたねばならない。

ニ．堀

神社周辺のトレンチ（5,１１,１２）に検出されたもので，明治２年神社築造時に掘られたものである。『院庄作楽香』等の文献にみられる堀である。

③　遺　　物

出土した遺物の主なものは次のとおりである。

(1)須恵器片（平安末～鎌倉時代），坏，甕

(2)青磁片，坏，壺　　(3)天目茶碗　　(4)古織部

(5)墨書磁器　　(6)摺鉢（備前焼，土師質）　　(7)鉄釘

(8)土鍋，土師器，甕　　(9)弥生式土器，壺，甕

〔4〕　まとめにかえて

院庄館址の調査は，現在図面等の作成中なので，厳密な遺跡の検討は今後にまたねばならないが，調査員会議により結論づけられた遺跡及び遺構の大すじは次のとおりである。

イ．調査地のほぼ全域にみられる黒色土上面の水田層は，鎌倉時代以降で江戸時代か同時代までである。

ロ．黒色土層は鎌倉時代か，それを大きく下らない時代の生活面である。即ち，館期の生活面としてよいであろう。

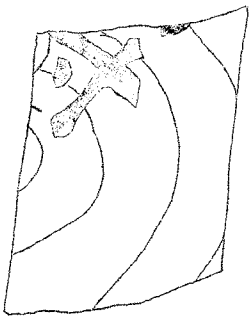
ハ．トレンチ１の井戸の時期は，鎌倉時代かそれ以前のものであろう。

ニ．トレンチ９（神社拝殿前）の井戸周辺に検出された柱穴群は，館期の柱穴として結論づけられるが，井戸との関連は井戸そのものの時期決定をまたねば結論づけられない。

ホ．土塁の構築された時期は，鎌倉時代かそれ以降で江戸時代以前である。

ヘ．本館址は従来から水田，畑等によって，土塁以外はかなり破壊されているであろう等の見方もあったが，調査の結果，遺跡地の破壊は明治２年以降，神社の築造ならびに整備に伴なう堀，池等によるもので，それ以外は大きく破壊されていないことが判明された。

ト. 周辺の切絵図を検討するに，史跡地外の東，西，北側に「御館」「御館掘り」「掘り」等の地名がみられる。このことは，もとの「館」は，史跡地外に拡張されて所在していたと推定される。（文責　河本）

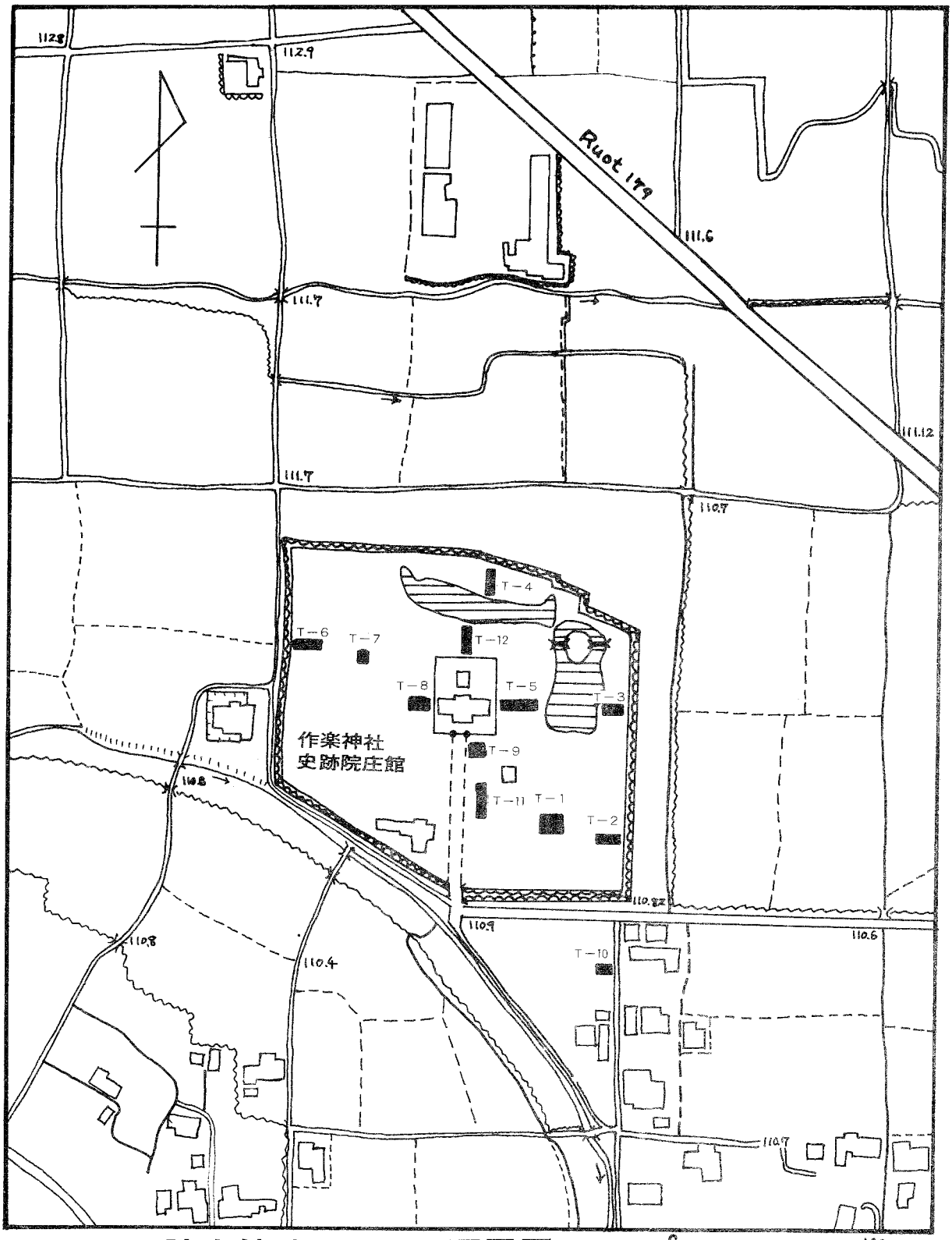


墨書磁器（S＝$^{1}/_{1}$）

T—11より出土

碗の底部に墨書

器厚5～7㎜　　白灰色を呈す



院庄館跡トレンチ配置図

0 100m